



野辺地駅にたたずむ馬車
(1950年代・県史編さんグループ所蔵)

馬車や馬そりというのと、久しい現在、日常生活で馬いかにも遠い昔の乗り物と車や馬そりを見ることはまいうイメージがある。けれども、実は昭和30、40年頃までは使われていたのである。自動車社会といわれても排雪機能が向上した昨今

の道路事情からすれば、その存在は過去のものである。

県の歴史広報担当者が、プロのカメラマンに依頼して撮りためてきた所蔵写真を整理していたら、野辺地駅を写した珍しい写真があった。駅舎自体が時代を感じさせるが、何と駅の前に馬車があるではないか。いつ頃のものだろうと台帳を見

野辺地の馬車

中 園

裕

(県民生活文化課

県史編さんグループ

主査)

たが、撮影年月日の記載がない。通常、県の広報写真には撮影年月日が記されているのだが、この写真には残念ながら記録がなかったのである。

そこで野辺地町立歴史民俗資料館の館長補佐である駒井知広さんと、同町にお住まいで県史編さん調査研究員でもある宮澤秀男さんに調査をお願いした。その結果、馬車は青森県種畜場

(現在は青森県農林総合研究センター畜産試験場) 専用のものだとうわかった。1950(昭和25)年から1961(同36)年にかけて使われていたという。種畜場職員の子供たちが3キロメートル離れている野辺地小学校にかよったり、近所の主婦たちが買い物に使用したりしたようだ。

以上のことから、この写真の年代は1950年代と推定できよう。ちょうど日本が高度経済成長に突入した時代である。それでも自動車は、まだ庶民の足というには早かった。だからこそ野辺地駅周辺でも馬車が走っていたわけである。

駅前を見ると、道路はまだ舗装されていない。もちろん馬にとっては、固いアスファルトよりも歩きやすかったろう。未舗装の道路を馬はのんびりと歩く。馬車に揺られながら、買い物にでかける女性たちが談笑したり、小学生たちがはしゃいでいたのだろう。現在のようにあわたたしくなく、人びとが余裕をもって生活していた時代だったのである。

なお、1951(昭和26)年7月7日の東奥日報に興味深い記事がある。1926(大正15)年に宮内省が種畜場へ下賜した2人乗りの宮廷用馬車が、時々町の中にも来るというのだ。種畜場の職員は明治馬車と呼んでいたという。2人乗りなので種畜場への来客など、関係者だけが使っていたと思われる。その後、この馬車が老朽化したため、最初に紹介した大型の馬車が導入されたのだろう。いずれにしても当時の事情を存じの方は、県史編さんグループまでご一報いただければ幸いです。

※野辺地の馬車については、青森県史のHPでも紹介しています。検索の際「青森県史」と入力すれば大丈夫です。ぜひ、ご覧ください！